

森山芳右衛門・芳平父子の頌功碑 (しょうこうひ)



伝統の桐生織物が、明治時代に本格的に近代化していく過程で、桐生産地では多くの先覚者たちの活躍があった。その代表格とされるのが森山芳右衛門と芳平父子である。

芳右衛門は小侯の生まれ、優れた織物技術を持ち、桐生の地に移り製織した精巧な縞子紋織は海外でも名声を博した。

長男の芳平は父の薫陶を受け、若いころから先進的な感覚で機業に従事した。化学染色法の産地への導入、織機の改良、横山嘉兵衛、藤生佐吉郎とともに初めて米国からジャガード機を輸入して皇居御用品の窓掛用紋織物を製織、ジャガードの桐生産地普及に大きな影響を与えた。

父子の足跡の偉大さは、習得した技術を自分だけのものとせず、全国の織物産地に広めた点にある。今泉村（現・東二丁目）の屋敷には、常に全国からの織物伝習生が寄宿し、化学染色法

や機織法を父子から学んだという。

明治22年（1889）、父子の献身的な織物伝習教育に感謝しようと全国の産地を支える門人たちが「頌功碑（しょうこうひ）」建立を計画。3メートルを越える石碑には、父子の業績が刻まれ、篆額（てんがく・題字）は時の文部大臣榎本武揚の書であった。当初は桐生駅前に建てる予定だったが、芳平は「そんなために皆を教えたのではない」とこれを固辞。結局、門人たちの熱い思いを汲み、屋敷の目立たない裏庭に建てられた。以来、120年を越える長い期間、この碑はほとんど人の目に触れることはなかった。

平成26年2月、織都の繁栄を伝える森山邸の解体が始まった。板塀が壊され、深い木立に囲まれた「頌功碑」が姿を現した。屋敷の跡地には集合住宅が建てられる計画で、碑の行く末が心配されたが、隣接する桐生森芳工場に運ばれた。今後、同工場の敷地内に再建することが検討されているという。

地域産業の近代化のみならず、全国の織物産業の発展に大きな視野をもって行動した森山芳平という産業人を語り継ぐ礎としたいものである。



伝習生が思いを込め建立 主屋解体で森芳工場へ移設

● 桐生森芳工場（桐生市東二丁目14-27 電話090-3473-0243）

写真上＝森山邸裏庭に建てられていた頌功碑（平成26年1月17日撮影）

写真下＝桐生森芳工場に運ばれる石碑（平成26年3月7日撮影）